



カレブ通信

2018年3月8日
第47号

内容

1 証「15年目の伊豆高原」 竹内保夫

2 カレブ ストーリー1
「宣教のエース世代への期待」 山口光仕

3 カレブ ストーリー2
「ことばの力」 関 智征

1 「伊東カレブの会」からの報告

昨年10月より「川奈カレブの会」から「伊東カレブの会」に名称を変更し、新たにスタートした新世話人代表の竹内保夫さんの証です。

15年目の伊豆高原

竹内保夫

私をはじめキリスト教会を訪れたのは、1966年頃神戸に住んでいた時のこと。妻がその教会の宣教師や伝道師に英会話やケーキ作りを習っていて、自分も夜に英会話のレッスンを受けようと3軒隣り（近い！）のそこに通い始めました。スウェーデン人の女性宣教師と通訳女性（日本人）伝道師が暖かく迎えて下さいました。妻は1968年12月に受洗し、1970年7月に名古屋に転勤になり、信仰心の皆無だった自分は、ヤレヤレこれで教会と縁が切れると思いましたが、ほどなくお二人が神戸より来訪され、妻のために福音教会の羽鳥純二牧師を紹介して下さい、そこで日曜礼拝を守るように整えてくれました。3回も来訪して世話を下さるお二人に、何が彼女達をこのようにさせるか（信者にしても神戸を離れたのだから、彼女達に何の利益もない…損害保険会社に勤めていた私の考え）彼女達の熱意に感動を覚え、1970年に神戸の垂水の海岸で受洗しました。1981年から2002年までバプテスト連盟の茗荷谷キリスト教会員として礼拝を守りましたが、高松・名古屋と単身赴任をし、その地のバプテスト教会で礼拝を守りました。妻は子供の学校の関係で東京に残り、南部バプテスト連盟より派遣されたジャーニマン達の学生センターの世話や、伝道委員として開設したカルチャークラス、教会事務等忙しくしていました。週5日は教会に通っていました。

63才で早期退職し、長年住み慣れた西荻窪（善福寺）の家を処分して、2002年に伊豆高原に移り住み、終末の教会と思った大室高原キリスト教会が、昨年3月思いがけなく閉鎖されるという初めての経験をしましたが、川奈聖書教会に迎えて頂き心から喜んでおります。山口牧師の力強いメッセージ、教会員一人一人のお心遣いに心より感謝です。今は川奈聖書教会が主で、二か月に一回茗荷谷教会に出席しています。「何事にも時があり天の下の出来事にはすべて定められた時がある」コヘレト3：1

我家は南西の角地で庭に20ヤード～30ヤードのゴルフアプローチが出来るよう、芝生を自分で作ったのが唯一自慢です。野菜も頑張って育てますが、種や苗代の方が収穫よりも高いといやみを言われ、頑張るのですが性分にあいません。庭は300坪以上あるのですが、この年では使いきれません。普段はゴルフとテニスを楽しみ、国内の列車の旅を楽しむという、のんびりしたスローライフになりました。

昨年10月にはカレブの会（家庭集会）伊東支部をスタートさせて頂き、山口牧師の「これからはこういう会の発展が大事」という考えを大切にしていきたいと思っています。川奈聖書教会を心より大切に礼拝を守らせて頂きます。

「カレブ ストーリーとは」

「今や私は、きょうでもう85歳になります。・・・モーセが私を遣わした日のように、今も壮健です」

（ヨシュア記14章）と、信仰によって主の御心を成し遂げたいと願うカレブの熱い思いが「カレブの会」のスピリットです。

「カレブ通信」には、現代のカレブとして歩む人々のさまざまな日常の物語りが綴られています。



2 カレブ ストーリー (1)



山口光仕牧師

1976年、神奈川県相模原市生まれ。洗足学園音楽大学音楽学部卒。ペンシルベニア州にて教会音楽の研鑽を積む。東京基督教神学校神学科卒。現在、川奈聖書教会牧師伊東熱海牧師司祭会会長ユーオーディア管弦楽団コントラバス奏者。各地の教会で演奏・伝道活動を展開

川奈聖書教会においては間違いなくリタイア後の方がエース世代。教会の中心的な働きを担ってくださっています。これからの日本のキリスト教会の鍵を握る世代と違って間違いないと思います。一方で労働力人口の減少が顕著になり定年時期の延長や再雇用など、少しずつ教会のエース世代が社会に奪われようとしている状況は、日本のリバイバルを願う者として静観しておられません。

お問い合わせ先：
guchikoji@gmail.com



宣教のエース世代への期待

日本同盟基督教団 川奈聖書教会牧師 山口光仕

伊豆半島・伊東市にある川奈聖書教会は全国的に地方伝道の困難が叫ばれる日本のキリスト教会の中で、着実に成長している教会として幾つかのキリスト教メディアに取り上げられています。教会の特徴は信徒の皆さん一人一人が賜物を生かして教会内に留まらず地域で積極的に証しを立てておられることです。そんな活気溢れる川奈聖書教会の働きの中心を担うのはリタイアした60代・70代の方々です。

地方においても現役世代の忙しさは顕著で主日礼拝を守るのが精一杯という現状。働き盛りといっても無理を強いることはできません。しかし現代の60-70代は本当にお元気で、忙しいストレスの多いサラリーマン生活から解放され気力体力ともに充実しています。しかも現役時代の豊富な経験があり時間もある。そう考えていくと、現役世代よりもむしろ主の奉仕者として好条件がそろっていることが分かります。川奈聖書教会においては間違いなくリタイア後の方がエース世代。教会の中心的な働きを担ってくださっています。これからの日本のキリスト教会の鍵を握る世代と違って間違いないと思います。一方で労働力人口の減少が顕著になり定年時期の延長や再雇用など、少しずつ教会のエース世代が社会に奪われようとしている状況は、日本のリバイバルを願う者として静観しておられません。

声を大にして皆さんに訴えたいこと。現役時代に培った経験をリタイア後に神様にお献げしてください。むしろそちらを人生の本番と思って、全てを会社に捧げ尽くすのではなく、良きものを神様のために残しておいていただきたいのです。牧師は聖書の専門家ですが教会において万能ではありません。教会が直面する課題・問題の範囲は非常に広く、また価値観が多様化する時代の中で、教会にいらっしゃる方々、関わりを持たれる方々も多様です。私どもの教会には会社、役所、学校、自営業、様々な場所で活躍してこられた信徒さんが集まっています。ですから色々な場面において、私より優れた経験・知識・判断力を持つ信徒の皆さんに助けていただいております。一方で、未熟なところが多々あっても御言葉と祈り、霊的導きにおいて信徒の皆さんは牧師を尊重し謙遜に耳を傾けてくださいます。このような信徒と牧師の良き信頼関係が得られていることは、この時代において川奈聖書教会の宣教の前進の大きな一つの要因と感じています。

1人のカリスマに頼る時代ではありません。ですから“牧師が前面に出て信徒たちが牧師先生をお支えする”という宣教のあり方ではなかなか発展性は望めないのではないのでしょうか。様々な経験や専門性を持った信徒の皆さんが賜物・個性を生かして教会を支え、また地域に出て行く。そういう皆さんの働きを牧師が御言葉と祈りをもって支える。川奈聖書教会はそのようにして宣教が前進してきました。

リタイアされた皆さんは「まだ出来ることがある」のではありません。今こそ出番・本番です。伊東でもカレブの会が始まりました。全国各地で教会の宣教のエース世代が救われ信仰を養われ、御国が大きく前進することを祈り、全国各地のカレブの会の働きに大いに期待をしています。

3 カレブ ストーリー (2)

「ことばの力」

関 智征



関 智征牧師

「始めに ことばがあった。・・・万物はことばによって成った。ことばによらずに成ったものは何一つなかった。ことばの内に命があった」

一般的に、ことばというと会話や文章などの言語を指します。しかし、「ことば」とはもった広い概念をさすのではないのでしょうか。朗読や音楽、料理、建築、ダンス、演劇、働く人間の背中・・・、様々な「ことば」が私たちを包んでいます。そして、神様は、様々な「ことば」で語りかけます。ある人は、美しい夕焼けの空をみて、ある人はピアノの音色を聞いて、神の存在を感じます。

1. 芸術に力を入れた教会開拓

私は、千代田区内に十数年、拠点をおいております。千代田区は、楽器屋やコンサートホール、ギャラリー、劇場などが集中しており、多様なアーティストが集まる地域です。

これまで、私自身は千代田区内のパパ友やボランティアつながりなどで、千代田区で活動するアーティストたちとの出会いに恵まれてきました。また、若い頃から、カメラマンや映像ディレクター、デザイナーの方々とお仕事をご一緒してきたこともあり、自然とアートに興味を持ちました。

牧師という仕事自体も、極めてアーティストックな仕事だ、と私は思います。共同体や教会活動をデザインし、「ことば」の筆で相手の心にスピリットを描く。その意味で、説教を含めた芸術表現を使って、目に見えない存在を体験できる「場」作りをできたらと思います。

2. 日本の伝統文化・芸術を生かして

2017年5月、ニューヨークのリディーマー・チャーチによる「シティ・トゥ・シティ」トレーニングに参加してきました。台湾での2週間のセッションの間、ニューヨーク、シドニー、ムンバイなど芸術が盛んな都市の牧師たちと、芸術と信仰についても議論しました。その中で、話題になったのは、「伝統文化と信仰」です。

日本では、良くも悪くも「キリスト教＝西洋文化」と広く認識されてきました。これは、ある意味、機会損失だったのではないのでしょうか。

これからスタートする教会においては、日本の良き芸術、たとえば琴やお香なども、取り入れたいと考えています。私たち日本人は古来より「美」の概念を重視してきました。その良き伝統を否定するのではなく、むしろ積極的に評価し、福音によって日本文化に新しい命が吹き入れられるような場を作りたい。

3. 「聖書×芸術」サロン

現在、芸術にフォーカスした「ブランド ニュー サロン」という名の集いを神田地区で初めております。このサロンは、スピーチを聞いた後、参加者同士が夕食を頂きながら、テーマについて話し合ったりする双方向型の講演会です。今まで、下記のように方々をお迎えして、芸術と信仰という視点で、ディスカッションしました。

- ・2017年4月：「建築デザインとキリスト教」香川壽夫（建築家、東大名誉教授）
- ・2017年6月：「バッハと石焼き芋と私」ロジャー・ラウザー（オルガニスト）
- ・2017年7月：「アートの視点からみた介護サービス」遠藤正一（ロングライフ）
- ・2017年12月：「アートの視点から見た英語」柴田真一（NHK ラジオ講座「入門ビジネス英語」講師）
- ・2018年2月：「アートと教育イノベーション」高橋一也（2017 グローバルティーチャー賞）

芸術×聖書という補助線によって、神様がそれぞれの領域に働いていることを分かち合う場を作ることが目標です。

一般社団法人 TWR 代表理事。明治学院大学社会学研究所研究員、東京工科大学兼任講師などを経て、現在、牧師。2018年より都心で教会開拓スタート予定。

4 カレブの会

男性クリスチャンが互いに証をし、祈りあうカレブの会の交流で、私自身も多くの力を頂いております。孤独になりがちな男性クリスチャンが「いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合う（ハブル 10:25）」必要性を学んでおります。

私どもの社団の活動でも、この3月にカレブの会に刺激を受け「Every Man As a Warrior（すべての男性は神の戦士である）」というプロジェクトを立ち上げます。

お問い合わせ先

seki.tomoyuki.0321@gmail.com

